

平成22年10月4日

2010インターバイク・ラスベガス

米国最大の自転車展示会であるインターバイク・ラスベガスが今年も開催された。昨年の同展示会は金融危機直後であり、多くの人々が来場するか心配された。今年の米国自転車市場は回復の年であると言われており、今後の小売販売の動向に注目が集まっている。このため、昨年のように展示会が低調に終わるのではないかといった危惧のようなものは感じられなかった。出展企業数は昨年と同規模、来場者数は昨年を上回るなど、結果として今年の展示会は成功であったと言えよう。ただ展示品に関しては、シングルスピードやコースターブレーキ付きの車種の展示が増えたように見受けられたものの、特に目新しさは感じられなかった。また大手有力企業の一部は出展しておらず、この点も気がかりであった。このような出展状況のもと、今後の米国自転車小売市場がどのように推移していくのか関心もたれるところである。尚、来年の本展示会は、場所をカリフォルニア州アナハイムに移し、会期も8月中旬に大幅に早められることが展示会事務局から発表された。

展示会の概要

展示会の名称：インターバイク国際自転車展（interbike INTERNATIONAL BICYCLE EXPO）

会 期：平成22年9月22日～24日（これに先立ちアウトドアデモと呼ばれる屋外新モデル試乗会が9月20日・21日に実施された）

会 場：米国ネバダ州ラスベガス市 サンズ・エキスポ・アンド・コンベンションセンター

主催者名：ニールセンスポーツグループ

入場者数：24,000人強(前年比3%増)、来場小売店数4,000店強(昨年と同様)、来場バイヤー数11,300名(昨年と同様) 海外バイヤー数は67カ国から1,872名(前年比44%増)

出展社数：1,200社以上（展示会事務局発表による、イベントガイド掲載出展企業数は949社）

アウトドアデモ出展社数：120社(昨年と同様)

アウトドアデモ来場者数：3,900名

尚この展示会はビジネスに特化した展示会であり、一般ユーザーの入場は対象とされていない。

1. 昨年と同規模の展示会

出展企業数は昨年とほぼ同じであり、展示会の規模は昨年と同様であった。入場者数は昨年より増えたものの、来場小売店数やバイヤーの数は昨年と同じなので、実質的にビジネスに直結する来場者の数は昨年と同規模と考えられる。

展示場は出展企業で埋まり、空きスペースは見られなかった。来場者の出足については、初日の午前中は若干閑散とした感じはあったものの、午後からは続々と来場者が増え、かなりの混雑となった。更に二日目は朝から夜まで終日賑わいを見せた。最終日も午前中まではかなりの人出であった。

2. 展示の内容等について

(1) 完成車

本年も例年通り自転車に関連した幅広い製品が展示されていた。完成車では、ロードレーサー、マウンテンバイク、通勤用バイク、ハイブリッド、シングルスピード、ビーチクルーザー、BMX、電動自転車、幼児・子供車等あらゆる車種が見られた。大手で多くの製品を手掛けているところは従来通り、高級レーサーとマウンテンバイクが主体、アルミやカーボンフレームを用いたものもみられた。またビーチクルーザー専門と言ってよいブランドもあり、このような企業は自社の得意とする製品を全面的に展示の主体に据えている。ブランド戦略が巧みで、このような自転車が専門小売店で高価で販売されている。一方BMXは、例年通りBMXの専門展示コーナーが設けられ、ここに各社が集められていた。BMXのコーナーは、自転車以外にウェアや用品類を併せて展示するところが多く、アウトドアファッション的な雰囲気漂っている。またBMXは部品にもこだわりが強いようで、BMX専用の部品を併せて展示しているところが多い。ところで、米国でもここ数年自転車を通勤や日常生活に使用することが提案されているが、これらの使用方法に用いられるのは、日本の軽快車モデルではなく、通勤用やハイブリッドと呼ばれる車種で、マウンテンバイクを街乗り用に派生させたようなタイプのものである。このような車種は、高級車に比べると仕様が異なり、どちらかというと小売価格も低くなるので、米国の自転車業界にとって自転車の日常利用が増えると業界が大きく繁栄するかと必ずしもそうとばかりは言えなさそうである。また数年前に、日本の軽快車に似た完全なタウンユースの車種が一部の完成車メーカーから提案されていたが、本年はあまり見られなかった。やはり米国では、日本の軽快車的なタイプは受け入れられる余地は少なく、レーサーやマウンテンバイクが基礎となった車種が普及しやすいのだと思われる。更に今年は以前に比べシングルスピードの展示が増えているように感じられた。シングルスピードは都会の自転車で、都市によって普及の度合いが全く異なると言われているので、より広く普及してきたのであろうか。一方で電動自転車の展示は、ここ数年よりむしろ減ったように感じられた。米国では電動自転車の普及はあまり進んでいない。

また、有名大手ブランドで出展していないところがあったが、この企業は例年出展しておらず、自社の商談会を実施して対応している。台湾の大手でも参加していないところがあったほか、従来大きな小間を構えていた専門店と量販店の両方に供給経路を持つ

大手企業も見当たらなかった。このように出展するかどうかは各社の独自判断にゆだねられている。

昨年から引き続き、出展しても自社の小間への入場を小売店やバイヤーに制限し、他の出展社の入場を認めない大手企業もあった。インターバイク展ではメディア関係者以外の一般来場者の写真撮影は禁止されているが、この企業では更に独自に写真撮影は禁止する旨の張り紙を出していた。模倣を恐れているという話であった。

(2) 部品

一方、部品企業も数多く出展している。大手部品企業の小間はどれも非常に立派であり、多くの来場者を集めていた。勿論我が国大手部品企業の小間が、最も美しい上に小間の位置も良く、いつもそうであるが高級製品の展示と相俟って高貴な雰囲気が感じられた。そして完成車ブランドが自社製品にどの部品企業の製品を採用するかという、コンポーネントの構成も興味深いところである。完成車ブランドのコンポーネント採用如何によって、そのブランドの自転車の販売が伸びるという事も起きていると聞いた。

部品に関しては、細かい専門の部品メーカーの出展もまだまだあり、これらは日本やイタリアのほか、台湾や中国の企業が多かった。自転車工業が立地している地域からの出展である。これらの小間へ行くと各企業は専門の部品に特化して製造している様子が良くわかる。日本やイタリアの専門部品企業の展示は高級感も高かった。

(3) 付属品

付属品・アクセサリーの展示も例年通り数多かった。ライト、サイクルコンピューター一等の他、ウェア、シューズは勿論、バッグやサングラス等の展示も多かった。これらの製品の展示小間は、比較的華やかで明るいところが多い。更にトライアスロン関連製品の小間も比較的多く見られるが、こちらは展示品そのもののみならず、展示小間の色合いまでもが黒をベースとしているところが多く、暗い印象がする。競技自体の性格が、厳しく甘えた気持ではなかなか参加できないからであろうか。

(4) その他

タイヤ・チューブの企業の出展も目立った。これらは大手企業が多いため、大規模な出展をしているところが多かった。この他会場の一角には試乗コーナーも設けられていたが、ここは比較的閑散としていた。また、自転車の乗用促進を行う団体の小間、自転車利用方法の提案を行う会社の小間、ツーリング・旅行関係の小間、業界団体、業界誌の小間等もみられた。米国の自転車小売店の協会であるNBDAは、業界誌社と並んで会場入り口に小間を出し、業界関係者との交流に努めていた他、インターネットカフェを設営し、来場者サービスに貢献していた。

3. 各国の共同出展等について

従来からイタリアンパビリオンと銘打って共同出展に力を入れているイタリアは、今年も更に力が入った出展を行っていた。小間の設営方法や装飾はますます洗練され、非常に美しく評判が良かった。このイタリアの共同出展は、イタリア貿易振興会がとりまとめ役となっている。イタリア貿易振興会はロサンゼルスに事務所があり、ここに担当

者を配置し出展者向けの各種支援を行っている。広報活動も非常に積極的に実施しており、インターバイク展のHP上で広告を打ったり、会場で配布されるイベントガイドに、イタリアンパビリオンの企業名や小間の位置を示した詳しい案内を掲載するなどしている。参加企業数は38社である。

また台湾も台湾パビリオンとして共同出展を行っているが、明るい感じの装飾を行っており注目された。小間の位置も良く目立つ存在である。参加企業数は37社であった。

更に中国のチャイナパビリオンと呼ばれる共同出展は、本年規模が一段と大きくなり、1つではまとまりきれず、大きな島が2つできていた。場所も変わり、昨年まで米国の大手企業が出展していた付近に出展していた。参加企業数は44社であった。

4. アウトドアデモについて

展示会開催前の20、21日の2日間に会場からバスで30分程移動したボールダーシティという場所の、荒涼とした砂漠地帯で開催されたアウトドアデモには多くの来場者が訪れた。特に2日目は非常に多くの人々が訪れ、アウトドアデモ会場は勿論、往復のバスに乗車するのも長時間行列しなければならないほどだった。ここでは多くのメーカーの新モデルが試乗出来る上に、試乗コースも各種用意されており、ロードレーサーやタイムトライアルバイク用の舗装路からBMXコース、初級～上級まで複数に枝分かれしたトレイルコースが設けられていた。更にトラックで山頂まで自転車をライダー每一緒に搬送し、一気に山を下るダウンヒルコースもあり、状況に応じた自転車の性能を十分に確認することができた。特にこのダウンヒルコースはかなりのハイレベルコースで、ダウンヒルに十分に慣れた参加者が自前のプロテクターとヘルメットを装着し、難しいコースをサスペンションやブレーキ性能を確かめながら颯爽と下っていった。報告者もトラックに乗って頂上まで行き、このダウンヒルに挑戦したが、予想以上に難易度の高いコースで、途中で転倒してしまった。転倒したところ、すぐにレスキューの人が駆けつけて来てくれ、声をかけてくれたのは嬉しかった。良い経験をする事ができたと思う。このように試乗コースは未舗装路が大半で、MTBの試乗が中心と言える。

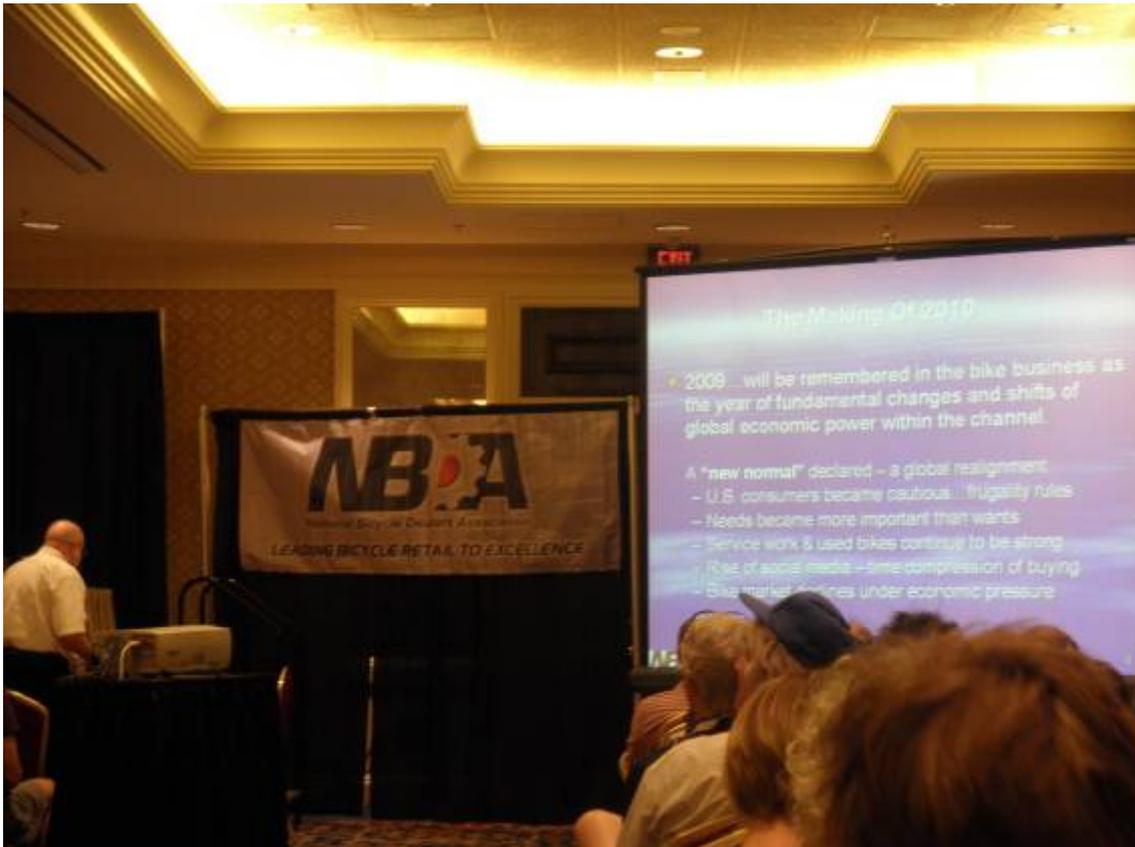
展示会には出展していない大手企業もここには出展しているところが多い。著名メーカーの前では試乗待ちの列ができ、調整・整備を行うメーカーのメカニックとの間で新商品の感触や疑問点について多くの意見交換がされていた。この他、ロードレーサーやタイムトライアルバイクの試乗も盛況で、未舗装路を走る姿も見られた。

またヘルメットや専用シューズを持参していない参加者のために、各メーカーから貸出も実施しており、自分のサイズに合ったヘルメットやロード、MTB用シューズを借りて試乗することも出来る。



5. 小売セミナー

今年も展示会に併せて米国自転車小売協会（NBDA）主催によるセミナーが、21日から24日にかけて展示会会場の会議室を用い開催された。販売促進、顧客サービス向上、優秀な店員の雇用と教育、修理による収益向上策、インターネットの活用方法、米国自転車市場の現状等幅広い内容を含むものであった。当協会の月次レポートを執筆しているジェイ・タウンレイ氏も22日の夕方から、米国自転車市場の動向及び消費者の行動様式の変化に関して講演を行い、多くの聴講者を集めた。



6. 来年のインターバイク展について

展示会事務局から、来年のスケジュールについて発表された。2011 年は場所をカリフォルニア州アナハイムのアナハイムコンベンションセンターに移し、会期も大幅に早まり、8月10日～12日とされた。1997年まで本展示会が開催されていたところであるが、その後コンベンションセンターは全面的に改築されている。またアウトドアデモはこれに先立つ8月8～9日にアーバインリージョナルパークというところで開催される。ここは同コンベンションセンターから12マイル離れたところで、試乗に適したシングルトラックやロードが完備されているということである。

展示会事務局によれば、会期を早めてほしいという業界各方面からの要望を勘案して新しい会期を定めたとしている。但し一部からは小売販売最盛期の真最中に展示会を開催することに関する疑問の声も上がっているようである。

2011年から2013年までの3年間アナハイムで開催される事が決定した。

7. 当協会の出展状況について

当協会は、今年も12小間を確保し共同出展を行った。今回の共同出展企業は、株式会社ヨシガイ・株式会社本所工研・株式会社井野屋・株式会社インタージェット・株式会社三ヶ島製作所・株式会社日東・株式会社スギノエンジニアリング・株式会社タンゲセイキ・株式会社ウエイブワン・株式会社テクノ南海の10社であった。昨年からイタリアや台湾の共同出展を参考として、インターバイク事務局と交渉し、各共同出展企業

名・住所・電話及びファックス番号・ウェブアドレス及び取扱製品区分をフロアプランや展示会ガイド及び展示会HPに掲載してもらうようにしている。各社とも終日多くの来場者に恵まれ、活発な商談・営業活動を行った。そして出展して良かった、是非来年もお願いしたいという声を多くいただいた。当協会に参加した企業の製品はどれも高級品であり、多くの来場者は製品を手に取り、非常に美しい、といった感想を述べていたのが印象的であった。また共同英文カタログ「JBG」の配布も行ったが、本年は昨年より持参部数を増やしたにもかかわらず、2日目の夕方に全て無くなってしまい好評であった。遠くニュージャージー州から来たある小売店の人から、毎年送付してもらっている、大変良いカタログだ、という言葉ももらった。

尚、小間の装飾については、予算の関係上、また補助事業の性格上最低限のものしか行っておらず、そのような出展企業は広い展示場を見渡しても他には殆どないのであるが、小間の位置が良いことと相俟って概ね評判は良い。各社の展示製品のグレードが非常に高いので、小間の装飾が多少貧弱でも、来場者は訪れてくれている。但しもう少し華やかな装飾を実施するかどうかについて、検討する時期に来ているのかもしれない。

以 上

(国際業務部、統括事業部)



この報告書は、競輪の補助金を受けて作成したものです。

